

原著論文

エチオピアの伝統的祝祭における舞踊の意味：

エチオピアの新年“エンクタタシュ”を事例として

野田 章子*

The purpose of dance in the traditional festivals of Ethiopia : a case study of the Ethiopian new year “Enkutatash”

Fumiko NODA

Abstract

The objective of this research is to clarify the purpose of dance in Ethiopia through examining the Ethiopian New Year's Festivals. At first, I researched the Ethiopian New Year's festival's ceremonies in detail and then analyzed style, rhythm, and the movements of the dance. Ethiopia is a very "complex concept" with over 80 ethnic groups and languages and multiple religions. This culture developed because Ethiopia has been an independent country for 3,000 years. The development of Ethiopia's unique cultural practices and distinctive character arose from the period of 3 B.C. and was further influenced by the spread of the Ethiopian Orthodox Church starting in 4 A.D. The Ethiopian Orthodox Church had great influence on the formation of Ethiopia as a nation and was the national religion until the Ethiopian Empire collapsed in 1975. However, political intervention of religion led into a decay of ethnic culture and ideas, contributing to the decline of traditional faith. How is such a "complex concept" reflected in society and dance? I researched the Ethiopian New Year's festivals in Addis Ababa on September 11 in 2014. The Ethiopian New Year “Enkutatash” is one of the Ethiopian Orthodox Church holidays, but people have been celebrating with ethnic customs differing from church rituals. It was revealed that the cause was a difference in interpretation of meaning and etiquette of the festivals among church officials who could understand Ge'ez language and those who could not. Additionally, the field study showed that in dances used in the Ethiopian Orthodox Church ceremonies, included both, characteristics of the religious and the ethnic dance. This may reflect ethnic culture and ideas. It became clear that the Ethiopian Orthodox Church accepted people, incorporating their ethnic culture, ethnic customs, and ethnic ideas in a tolerant position in connection with political intervention of religion. As a result, dance in Ethiopian New Year's festivals has two sides, religious and ethnic, and reflects the complex relationship between ethnicity and state through religion. Ethiopia is a drastically developing country, and its economy is developing. Along with this, people's lives have changed greatly, especially as the interest in religion among young people and opportunities for traditional dance have become less than before. In the future, I would like to consider how the role of dance will change in Ethiopia and what role dance will play through Ethiopian society.

keywords: Dance, Ethiopia, New Year's festivals

キーワード：舞踊、エチオピア、新年の祝祭

* 立命館大学社会学研究科応用社会学専攻博士後期課程

I 序章

1 研究の背景と目的

エチオピア連邦民主共和国（以下『エチオピア』と略称する）はアフリカで 3000 年の間独立国として自国の歴史を築いてきた国であり、独自の文字や宗教が現存している。また、80 以上の民族の舞踊にはエチオピアの独自性や多様性が反映されており、その研究価値が指摘されている。さらにエチオピア北部は、紀元前から今日に至るまで文字を有しており、アフリカの無文字社会における舞踊の調査研究と比較可能な研究成果を得られるため、アフリカの舞踊に関する研究をさらに深める手がかりになると考えられる。

小川は、「ダンスは言語と同じように、各々の文化の核にあるものを伝承してゆくための一つの媒介項であることは間違いないであろう」と述べ、「各民族のダンスはその人々がおかれている社会・文化に特有な規制を相当受けたものなのだ」（小川，1984，p.25）と結ぶ。小川が述べるようにエチオピアの舞踊も、エチオピアの自然環境や生業形態などと密接に結びついた日々の営みであり（池田⁽¹⁾，2000，p.48）、エチオピアの人々を知るための重要な研究課題であるといえる。

本研究でとりあげたエンクタタシュ（Enkutatash）は、エチオピアのキリスト教⁽²⁾と称されるエチオピア正統テワヒド教会（Ethiopian Orthodox Tewahedo Church）（以下『エチオピア正教会』と略称する）の元日である。ゆえにエチオピア暦⁽³⁾の 1 月 1 日であり、西暦の 9 月 11 日（前年が閏年ならば 12 日）にあたる。エチオピア正教会は、4 世紀にエチオピアに伝えられたキリスト教信仰を継承したものであり、食物禁忌をはじめとするユダヤ教的慣習の遵守など他のキリスト教には見られない独特の慣習を有している。このエチオピア正教会が、長期にわたってエチオピ

アの国教となっていた⁽⁴⁾ため、現在でも 3000 万人（国民のおよそ 40%）を超える信者が存在し、その独特な慣習は受け継がれ（石川，2014）、舞踊にも影響を及ぼしている。

よって、本研究では、エンクタタシュの祝祭を事例として、第 1 にエチオピアの伝統的な新年の祝祭を調査しその詳細を明らかにし、第 2 に新年の祝祭で踊られている舞踊の様式、舞踊のリズム、舞踊の動作などを分析して、エチオピアの新年の祝祭における舞踊の意味を考察することを目的とする。

2 先行研究の検討

エチオピア正教会の儀礼の舞踊に関しては以下の先行研究があげられる。マーチン（Martin）（1967）は、鈴と太鼓を伴奏に踊るエチオピア正教会の儀礼の舞踊が旧約聖書の伝説に由来していることを示し、杖を使いながらやや揺れ動くような儀礼の舞踊が、その終わりでは儀式的で堅苦しい雰囲気緩和され、手拍子や跳躍を伴う活発な舞踊に変わることを指摘している。また、アバ（Abba）（1970）がエチオピアの聖歌には西洋の人が使うような音符はなく、6 世紀から伝わる音節記号が用いられていることを述べ、聖歌にはリズムカルな体の動きや手拍子が伴うと記している。さらにキンバリン（Kimberlin）（1980，1986）は、儀礼の音楽に着目している。具体的には儀礼で使われる楽器や手拍子について調査し、儀礼の音楽のリズムを音符と動作で記譜し、分析している。キンバリンが儀礼の音楽を音符で記譜したことは、諸外国の研究者がエチオピアの儀礼を理解するのに非常に有効であったといえる。また、エチオピアの典礼音楽を研究しているケイ（Kay）（1982）がエチオピアにおける宗教音楽の教育方法を論じ、儀礼の舞踊や楽器の演奏が、特定の神学校において習得されていることを明らかにしている。近年では、バンタレム（Bantalem）（2010）

がエチオピア正教会の祝祭の目的や内容を論じ、儀礼における聖職者の動作に込められた宗教的な意味を明らかにしている。バンタレムの研究は、ゲエズ (Ge'ez) 語の聖書に基づいている貴重な考察である。

日本では、この儀礼の舞踊のことを鈴木 (1969) が“司祭の踊り”、川又 (2005) が“奉納歌舞”と示している。鈴木は教会のなかで司祭が踊るのは、アメリカの振興キリスト教を除いては他にないと述べ、エチオピア正教会のユダヤ教的な特徴を指摘している。川又は初期のキリスト教が楽器の演奏や踊ることを異教のシンボルとして厳しく戒めていたことから、エチオピア正教会の奉納歌舞はキリスト教の常識では考えられないと言及し、その研究価値を示唆している。

このようなエチオピア正教会の儀礼の舞踊に関する先行研究を概観すると、音楽や宗教の研究を通して儀礼の舞踊の詳細が明らかにされていることが分かる。しかしながら、儀礼の舞踊の動作に着目し、動作を分析している研究は極めて少ない。したがって、エンクタタシュの祝祭を対象に調査をおこない、儀礼の舞踊の動作を分析してその意味を明らかにしようとした本研究には、意義があると考えられる。

3 調査の対象と調査の方法

調査地のエチオピアの首都はアディスアベバであり、主な公用語はアムハラ (Amhara) 語である。アディスアベバで暮らす主な民族はアムハラ民族である。調査の対象は、2014 年 9 月 10 日にアディスアベバ近郊のインフォーマント氏宅でおこなわれたエンクタタシュ前日と当日の祝祭、および 2014 年 9 月 11 日にエントト山 (Mt. Entoto) 近郊と聖レグエル教会 (St. Reguel Church) でおこなわれたエンクタタシュ当日の祝祭である。インフォーマント氏宅とは、アディスアベバ大学民族博物館副館長で、地域の教会学校の

の教師をしている (2014 年調査時) タマスゲン・ヨハネス (Temesgen Yohannes) 氏の自宅である。エチオピア正教会において教会学校の教師は、聖職者ではなく平信徒の立場である⁽⁵⁾。

エントト山はアディスアベバ以前の首都であり、1880 年代にメネリク 2 世 (Menelik II) によって 3200m の山頂に建設された聖レグエル教会は、アディスアベバで最古の教会として信者達から崇拝されている。聖レグエル教会は、エンクタタシュを盛大に祝うことで有名であるため、調査の対象として適していると考えられる。またアディスアベバおよびその近郊にはエチオピア正教会の信者が多くいるため、祝祭の調査地にふさわしいと判断した。調査の対象にした舞踊は、エンクタタシュ前日に未婚の男子によって踊られるホイヤホイエ (Hoya Hoya)、エンクタタシュの当日に未婚の女子によって踊られるアベバイオッシュ (Abebayoish) およびエチオピア正教会の新年の祝祭で踊られる儀礼の舞踊“アクアクアム” (Aquaquam) である。教会内のアクアクアムは聖職者のみができる儀礼舞踊であるが、筆者が研究者であるため特別に参加が許可された。

調査の方法は、2014 年 9 月 1 日～9 月 17 日にエチオピアのアディスアベバおよびその近郊にて舞踊人類学的な調査を行った (表 1)⁽⁶⁾。具体的には、教会関係者および舞踊関係者への聞き取り調査を行い、AV 機器による客観的な舞踊映像の記録と舞踊動作の記録を行った (表 2)。また、聞き取り調査では、ケアリノホモク (Kealiinohomoku) のダンス・データ・ガイド (Dance Date Guide) (ケアリノホモク, 1976, pp.25-27) に依拠して、質問項目を作成し (表 3)、半構造化インタビューを実施した。さらに AV 機器による客観的な舞踊映像記録と動作収録は、ビデオカメラおよび簡易モーションキャプチャ：キネクト⁽⁷⁾ (以下『キネクト』と略称する) を使用して収録を行った。

表1 現地調査の日程と対象

調査日	対象	場所	映像記録用機材
2014年9月10日	新年の祝祭前日の準備と様子	アディスアベバ郊外のインフォーマント氏宅	Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V
2014年9月10日	地元の子どものホイヤホイエ	アディスアベバ郊外のインフォーマント氏宅	Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V Sony
2014年9月10日	教会学校生徒のホイヤホイエ	アディスアベバ郊外のインフォーマント氏宅	Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V
2014年9月11日	エチオピア正教会の新年の祝祭	エントト山の聖レグエル教会	Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V
2014年9月11日	地元の子どものアベバイオッシュ	エントト山の聖レグエル教会周辺	Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V Sony
2014年9月11日	教会学校生徒のアベバイオッシュ	アディスアベバ郊外のインフォーマント氏宅	Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V

表2 聞き取り調査の対象および調査内容

調査日	対象	場所	調査内容	映像記録用機材
2014年9月2日	アディスアベバ大学民族博物館副館長 タマスゲン・ヨハネス氏 (Temesgen Yohannes)	アディスアベバ大学	エチオピア正教および祝祭の歌と舞踊に関する聞き取りおよび祝祭の歌の収録	・ Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V
2014年9月12日	国立民族舞踊団舞踊手 トーマス・ハイル氏 (Thomas Hail)	バロホテル	民族の舞踊の動作に関する聞き取りおよび舞踊動作の収録	・ Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V ・ Kinect for Windows Sensor L6M-00020 ・ Kinect for Windows SDK v1.8
2014年9月14日	国立民族舞踊団太鼓演奏者 ゼリフン・ベケレ (Zerifun Bekele)	国立劇場	民族の舞踊のリズムに関する聞き取りと歌とリズムの収録	・ Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V
2014年9月15日	私立民族舞踊団代表者 マイケル・メラク氏 (Michael Melake)	バロホテル	エチオピアの現状と舞踊の現状に関する聞き取り	・ Sony Digital HD Video Camera Recorder HDR-PJ590V

表3 聞き取り調査の質問項目

A. 舞踊の概観	B. ダンスの背景	C. 参加者の背景
1. 名称と種類 2. 地域性と環境 3. 日時と季節 4. 時間と期間 5. 機会 6. 参加者	1. 機能と目的 2. 舞踊の意味やストーリー 3. 芸術的、宗教的、遊戯的な舞踊の分類 4. 地域の他のダンスとの比較 5. 舞踊の所有者と伝承の方法 6. 舞踊の作者 7. 舞踊の習得法と再現法 8. 舞踊や舞踊手の専門的な呼び名 9. 良い舞踊の民族的な評価	1. 舞踊手と観客の構成（年齢、秘密結社など） 2. 舞踊手の人数、年齢、性別 3. 舞踊手の身体的特徴 4. 舞踊手の地位 5. 舞踊手の報酬 6. 舞踊手の訓練法 7. 良い舞踊手の民族的な評価 8. 統率者、指導者、第1舞踊手などの特別な役割 9. 観客の役割

参考 ダンス・データ・ガイド（ケアリノホモク，1972，pp.31-32）

4 舞踊の分析の方法

舞踊の様式は、ケアリノホモク（1976）による舞踊分析を参考にして遠藤（2002）が作成した舞踊のチェックリスト I、II に依拠して、アクアクアムの舞踊チェックリスト I（舞踊の概要、舞踊の背景、踊り手の背景の検討）および II（舞踊構造と伴奏、振付の検討）を作成し、分析を行った。舞踊のリズムについては、キンバリン（1986）の教会の音楽の分析に依拠して、アクアクアムの流れを表に示し、分析を行った。舞踊動作については、ケアリノホモク（1976）の舞踊動作分析に依拠して、次に述べるグラフノーテーション（Glyphnotation）を用いて分析を行った。

グラフノーテーションの記譜法に関しては、以下の通りである。

ケアリノホモクは、「グラフノーテーションはラバノーテーション（Labanotation）⁽⁸⁾を簡易にしたものである」（ケアリノホモク、1976、p8）

一				体				4
一	四	五	五	五	五	五	四	3
一	四	四	四	と	四	四	四	2
一				頭				1
1sg=」								

図1 グラフノーテーション譜表

と説明し、この記譜法をクーラス（Kurath）⁽⁹⁾に教わったと述べている。中村は「この方式は、アフリカの舞踊、つまり、体幹の動きに関与性のある舞踊を記譜するのに適した記譜法であり、イミック（emic）な研究（同文化内での比較研究）には有効である」（中村、2002、p.97）と指摘している。その記譜法の詳細は以下のとおりである。なお紙面の都合上、本論文に作成したグラフノーテーションの図を理解するのに必要な範囲に限って、その記譜法を記載する。

グラフノーテーションの譜表は、胴体と頭の動きを中心に、その右側に右の腕、右の脚、右の足、その左側に左の腕、左の脚、左の足の順で記譜する（図1）。グラフ（glyphs）は、人の骨格構造の絵文字のことであり、グラフノーテーションでは、各部位の体の動きを表す絵文字を上記の譜表に記譜する（図2）。各絵文字には言葉による説明がつけられ、動きの違いが識別できるように

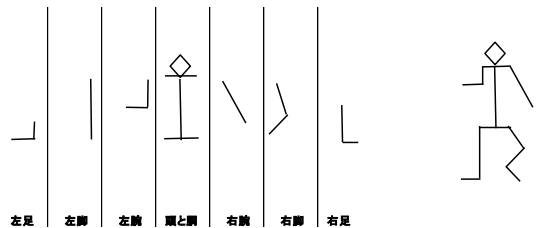


図2 グラフノーテーションの骨格構造の絵文字記譜例

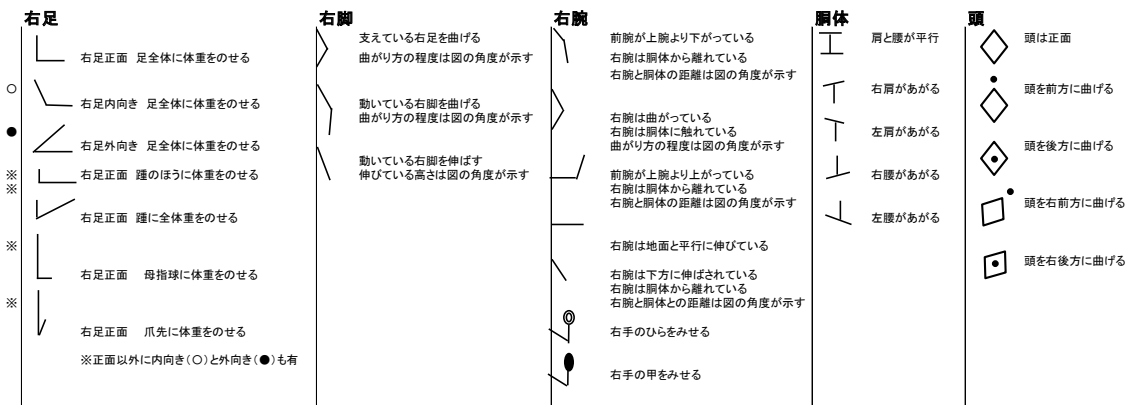


図3 グラフノーテーションの骨格構造の絵文字の種類

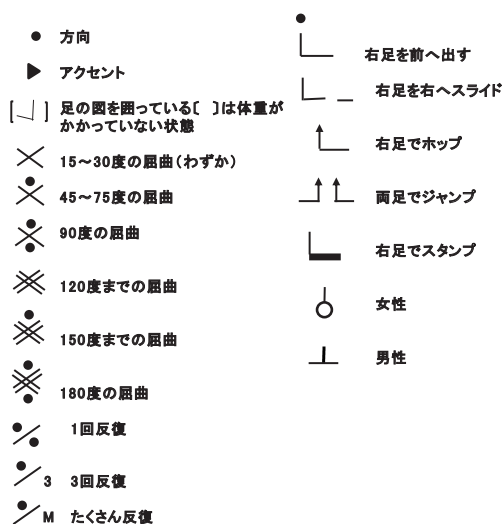


図4 グラフノーテーションの記号例

なっている（図3）。さらに、角度、方向、回数、動き方、男女などを示す記号（図4）があり動作や舞踊の詳細を記譜できる。

5 語義規定

本論文では、一般に“ダンス”、“踊り”、“舞踏”など多様に表記されているものを“舞踊”という言葉を使って広義にまとめている。しかし、引用文献などにおいては、その限りではない。また、エチオピアでは、“Song”と“Dance”を切り離すことはできず、“Song”や“Dance”に匹敵する言語も見当たらない。よって本論で使う“舞踊”には、歌と踊りの両方を含んでいる。エチオピアの主な公用語であるアムハラ語では、宗教的な舞踊を“ゼマ（Zēmā）”、世俗的な舞踊を“ザファン（Zafan）”と呼び区別する（ケイ，1982，p.52）。

遠藤（2010）はスポーツ人類学におけるスポーツとは、競技のほかに遊びや舞踊も含む広い意味でつかわれていることを指摘し、そのうえで、舞踊人類学という言葉が1970年代にかけて登場してきたことを述べ、この分野のパイオニアはクーラス（Kurath）だと述べている。よって本論文では、このクーラスに始まった舞踊の人類学的研究

を“舞踊人類学”と示す。

本論文では、「他の文化での身体を用いた表象をもってしてはどうい置き換えることのできないもの」（小川，1984，p.24）、つまり民族固有の身体的特性を表現したものを“民族の舞踊”ととらえている。よって、アフリカの舞踊およびエチオピアの舞踊とは、当該民族の文化に培われた伝統的な舞踊を意味する。

本論文のアフリカとは、エチオピアを含むサハラ砂漠以南の長い間“無文字社会”であったアフリカを指している。ただし、エチオピアの北部に限っては、前述の通り文字を有していたため、アフリカに含まれている例外的な地域と認識されている。

日本語の先行研究において“Ethiopian Orthodox Tewahedo Church”は“エチオピア正教会テワヒド教会”、“エチオピア正教会”、“エチオピア正教”、“エチオピアのキリスト教”など多様に表記されているが、本論文では、エチオピアの宗教に関する参考文献にとりあげた石原（2014）の表記に依拠して“エチオピア正教会”を用いている。

また、エチオピアの新年を表わす英語表記は“Enkutatash”、“Inkutatas”、“Inqutatash”など複数あるが、本論文では、エチオピアの祝祭に関する参考文献にとりあげたバンタレム（2010）の表記に依拠して“Enkutatash”を用いている。

その他の固有名詞などの英語表記、カタカナ表記は、引用文献、参考文献に記載されているものに準じて記載する。なお、エチオピア人に関しては、苗字がないため本人の名で本文に記載している。

II エンクタタシュの祝祭の調査報告

次に、エンクタタシュの祝祭の調査について、1 エンクタタシュ前日の様子、2 エンクタタシュ当日の様子の2点から報告する。

1 エンクタタシュ前日の様子

2014年9月10日のエンクタタシュ前日、アディスアベバ近郊インフォーマント氏宅の様子は以下のとおりであった。鶏を夕方までに夫である男性が屠殺し⁽¹⁰⁾、妻である女性がエチオピアの伝統的な料理ドロワット (Doro Wet)⁽¹¹⁾ を作っていた。その他、妻はインジェラ (Injera) (写真1)⁽¹²⁾ を用意し、新年の特別なパンであるヤベシャダボ (Yabesha Dabbo) (写真2)⁽¹³⁾ を焼いていた。また、数日前から家の中や外などいろいろな所に緑の草が敷かれていたが、これはキエテマ (Kietema) (写真3) と呼ばれており、“濡れた青草”と訳されている。キエテマを撒く風習は“ノアの箱舟”⁽¹⁴⁾ に由来しているという。

バンタレムは、エンクタタシュについて、民衆と教会の解釈の相違を説明している。バン



写真1 インジェラとドロワット
2014.9.11 筆者撮影



写真2 ヤベシャダボ
2014.9.11 筆者撮影



写真3 キエテマ
2014.9.11 筆者撮影

タレムによれば、民衆は“Enkutatash”はアムハラ語の“Enqu”と“Letatesh”に由来していると理解していて、“Enqu”は“jewels”を、“Letatesh”は“meaning for your fingers”を意味するという。つまり、“Enkutatash”は、シバ女王がソロモン王からたくさんの宝石をもらい、イスラエルからの帰還の旅を保障してもらったという解釈になる。そのため元日の朝には、女兒が花束を持ちながらシバ女王のエチオピア帰還を祝福する歌を歌う。しかし、このような説をエチオピア正教会は認めていない。理由は、この時代にはまだアムハラ語がきちんと体系化していなかったためであり、新年に女兒が花を贈る慣習は、ノアの方舟のハトがキエテマを運んできたことに由来し、あくまでも洪水の水が乾いたことを告げるためだと説明している (バンタレム, 2010, p.43)。さらにバンタレムは英語の“Bread”や“Dough”を意味するアムハラ語の“Buhe”は、ゲエズ語では“Light”や“Happiness”を意味し、ヘブライ語で“God”を意味していることを説明している (バンタレム, 2010, p.101)。つまり、新年に特別なパンを焼くことも民衆の解釈であり、エチオピアではゲエズ語の理解できる聖職者と理解できない民衆の間でその祭りの意味や儀礼が異なっている点が指摘されている。

インフォーマント氏宅では、チボー (Chibo) (写真4) と呼ばれる乾燥したユーカリの小枝の束が、家族にいる男性の数だけ用意されていた。



写真4 チボー
2014.9.10 筆者撮影

エンクタタシュの前日に、このチボーを燃やす風習⁽¹⁵⁾があり、そのためチボーは、“たいまつ”と訳されている。また、前日にはこのチボーを囲んで男児（未婚の男子）がホイヤホイエ（Hoya Hoya）⁽¹⁶⁾を歌い踊る風習がある。毎年、新年前日に日が暮れると、数人から数十人の男児がひとつのグループになり、それぞれの手に木の棒を持ち、家々をまわる。この木の棒は親が用意したもので、毎年同じものが使われるという。また、アルミを重ね合わせた鈴を鳴らすこともある。これらは、聖職者が儀礼の舞踊に使う杖や鈴⁽¹⁷⁾を真似している。男児は、歌に合わせて木の棒をついて鈴を鳴らし、飛んだり跳ねたりを繰り返す。祝祭の最後には、チボーを燃やし揺らめく火を家族みんなで囲い、チボーが燃え尽きるまで男児は歌い続ける。燃える火には、今年の凶を全て焼きつくし、すばらしい年を迎える準備をするといった意味があるという。

今回の調査でも、9月10日の夕方、小学生ぐらいの少年達4人がインフォーマント氏宅の庭先でホイヤホイエを歌い始め、手に持っている木の棒で地面を叩きだした。歌のリズムが軽快になると、地面を棒で叩きながら少年たちは円になり、地面を棒で叩きながら反時計回りに軽く走り出した（写真5）。周りで見ているものは、少年達の



写真5 ホイヤホイエ
2014.9.10 筆者撮影

歌に合わせて“ホッ”と掛け声をかけていた。歌と踊りは、リーダーに小遣いを渡すまで続けられた。

2 エンクタタシュ当日の様子

2014年9月11日のエンクタタシュ当日の様子である。

朝7時エントト山近郊では、キエテマと黄色い新年を告げるアディアベバ（Ady Ababa）（写真6）⁽¹⁸⁾の花をもった女兒が家々をまわり、アベバイオッシュ（Abebayoish）⁽¹⁹⁾を歌っていた（写真7）。女兒たちは歌う代わりに、小遣いやヤベシャダボのスライスをもらっていた。このように都会ではパンや小遣いをもらっていたが、田舎では新しい洋服や家畜をもらうこともあるという。

エントト山の聖レグエル教会内の早朝の儀礼は、4時に始まり6時に終わった⁽²⁰⁾。

教義では、信者は聖職者と同じ入口を使えないため、教会には東、北、南の3つの入り口があ



写真6 アディアベバ
2014.9.25 筆者撮影

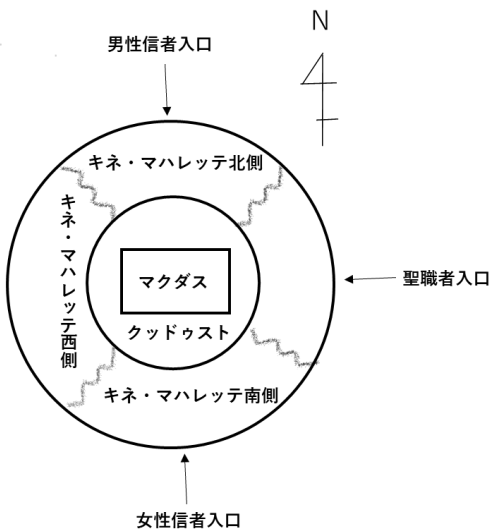


写真7 アベバイオッシュ

2014.9.11 筆者撮影

り、聖職者は東側、男性信者は北側、女性信者は南側から出入りする。教会の内部には靴を脱いで入り、儀礼には白い布を頭や体に巻いて参加する。この白い布はシャンマ (Shanma) と呼ばれ、白は洗礼を意味している。

聖レゲル教会は円形の建物であり、円形の教会内部は三重構造 (図5) である。教会の外側からキネ・マハレット (Qenie-Mahilet)、クッドウスト (Kiddest)、マクダス (Makdas) と呼ばれる。キネ・マハレットの西側は聖職者の儀礼の場である。聖職者は男性に限られている。このキネ・マハレットの西側では、クッドウスト、マクダスへ



図中の~~~~は仕切りのカーテンを示している
キネ・マハレットはカーテンで仕切られている

図5 聖レゲル教会の三重構造

表4 教会内で行われた新年の儀礼の流れ

- ①聖職者による聖歌
- ②聖職者による儀礼の舞踊「アクアクアム」
- ③教会代表者による新しい1年の暦の呈示と説明
- ④キリストの先駆者でキリストに洗礼をしたバプテスマのヨハネ (St.John) への崇敬の念の表明
- ⑤様々な信者の今年の願いを祈禱 (人々や家畜の救済保護、悪天候や害虫からの農作物の保護などに対する祈禱など)
- ⑥聖職者による儀礼の舞踊「アクアクアム」
- ⑦聖職者による聖歌
- ⑧教会代表者の十字架に口づけをする

の扉が開かれていた。クッドウストは霊的交渉をする場であり、聖体拝領の儀礼が行われる場である。マクダスは教会で最も神聖な場所で、四角い部屋に聖櫃タボット (Tabot) が収められていて、聖職者しか入ることができない。教義では信者は聖職者と同じ空間で儀礼を執り行えないため、キネ・マハレットの西側とカーテンで仕切った北側が男性信者、南側が女性信者の儀礼の場となっていた。しかし、教会の建物の外にも大勢の信者がいるため、教会内部の儀礼はマイクとスピーカーを使って外部に聞こえるように工夫されていた。石原が「この音響効果は、疑似的な宗教的空間を教会の敷地外につくりだしている」(石原, 2014, p.73) と述べているように、スピーカーによって教会内だけでなく、教会の敷地外にまで儀礼の場が広がっていた。教会内では、聖職者による祈祷、聖職者による儀礼の舞踊「アクアクアム」(写真8)、教会代表者の話など約120分の儀礼が執



写真8 教会の中での儀礼の舞踊「アクアクアム」

2014.9.11 筆者撮影



写真 9 教会の外での儀礼の舞踊“アクアクアム”

2014.9.11 筆者撮影

り行われた。

教会内の儀礼が終わると、教会の外にいる大勢の信者を対象に、教会の外で9時頃から11時頃まで儀礼が行われた。教会の外での儀礼は、断食の日（水曜日と金曜日）には午前中に、断食の日以外は午後から行われる。それは、断食の日が一日一食となり15時以降にしか食事ができないためである。教会の外での儀礼では、最初に聖職者が十字架を掲げて歩き、信者がそれに続き、共に聖歌を歌いながら、教会の周りを反時計回りに3周ジョギングした。ジョギングによってテンションが上がり、人々の喉をならす声や鳥がさえずる

ような声（ビブラート）が大きくなり、人々の気持ちが高揚していく様子が観察された。そのあと教会の前につくられた特設のステージで教会代表者の話、聖職者による祈祷、聖職者による儀礼の舞踊“アクアクアム”（写真9）など約120分の儀礼が執り行われた。教会の外の儀礼では、聖職者、男性信者、女性信者の儀礼の場の区別はなく、聖職者による儀礼の舞踊“アクアクアム”の周りで男女の信者が混ざり合い、聖歌を歌い、拍手や声でその場を盛り上げていた。

Ⅲ 儀礼の舞踊“アクアクアム”の分析

次に、儀礼の舞踊“アクアクアム”について、1 舞踊の様式、2 舞踊のリズム、3 舞踊動作を明らかにしながら分析をおこなう。

1 舞踊の様式

アディスアベバ大学民族博物館副館長であるタマスゲン氏の聞き取り調査でチェックリストⅠ「儀礼の舞踊“アクアクアム”の概観」（表5）の

表5 チェックリストⅠ 「儀礼の舞踊“アクアクアム”の概観」

Ⅰ 概観	
Ⅰ.1 時期および期間 観察時間	9月11日（閏年は12日） 元日 ① 4:00～6:00 ② 9:00～11:00（元旦が水曜日・金曜日の場合 それ以外は午後から）
Ⅰ.2 場所	① 聖レグエル教会内 2階西側 ② 聖レグエル教会屋外 特設ステージ周辺
Ⅰ.3 参加者	① 聖職者と助祭（デプテラ） ② 聖職者と助祭（デプテラ）
Ⅱ 舞踊の背景	
Ⅱ.1 目的または機能	暦の呈示や今年の願いを祈禱し、新しい年を祝う儀式の一部
Ⅱ.2 舞踊の意味	神への奉納踊り
Ⅱ.3 舞踊の分類	儀礼的
Ⅱ.4 所有者	エチオピア正教会
Ⅱ.5 作者	不明
Ⅱ.6 習得法	エチオピア正教会関係の学校
Ⅱ.7 特別名称	アクアクアム（Aquaquam）
Ⅱ.8 良い舞踊の基準	神に祈りが届くもの 聖歌や太鼓の演奏が良いもの
Ⅲ 主となる踊り手の背景	
Ⅲ.1 年齢・性別・人数	成人男子 20人～30人
Ⅲ.2 報酬	給料制
Ⅲ.3 練習法	エチオピア正教会関係の神学校（アクアクアム・ベッド）
Ⅲ.4 良い踊り手の基準	聖職者や助祭（デプテラ）であり、ゲエズ語の取得をした者

内容が明らかになった。その結果、アクアクアムは聖職者による神への奉納踊りであること、神学校でアクアクアムを習得したデブテラ（Dabteras）と呼ばれる助祭によって聖歌や楽器の演奏が行われること、またエチオピア正教会の経典はゲエズ語で書かれているため聖職者にはゲエズ語の習得が求められること、さらに聖職者は成人男性と決まっているため、アクアクアムを踊れるのも成人男性だけであることが分かった。

また、筆者の調査からチェックリストⅡ「教会の外で踊られた儀礼の舞踊“アクアクアム”の舞

踊構造」（表6）を明らかにした。その結果、アクアクアムにはA-B-C-C'という舞踊のフォームがあり、Aは♩≒33、Bは♩≒45、Cは♩≒54、C'は♩≒108のテンポであった。またアクアクアムでは、体を左右に揺する、足踏み、歩行、跳躍などの動作が観察され、鈴や杖、太鼓は決められたタイミングとスタイルで動かされていた。アクアクアムの構成は、杖と鈴を持って踊る人は30名程度、マイクを持って歌う人1名、太鼓を演奏する人3名であった。空間デザインは、狭い限られた場である教会内の儀礼では、終始太鼓演奏者を

表6 チェックリストⅡ 「教会の外で踊られた儀礼の舞踊“アクアクアム”の舞踊構造」

1 舞踊構造と伴奏	
1・1 主題パターン	各自が左右に揺れるゆっくりした動きから始まり、しだい足踏み、前後歩行、円での公転などに動きがダイナミックに変化していく
フォーム	フォーム A-B-C-C'
1・2 パターン化された部分	最初から最後まで決まった動きでパターン化されている
1・3 ダイナミクスと変化	最初A ♩≒33の4拍子、次はB ♩≒45の4拍子と6拍子、そしてC ♩≒54の6拍子、最後はC' ♩≒108の6拍子になる
1・4 自己伴奏	踊り手は、各自鈴を鳴らし、杖を肩に担ぎ、聖歌を歌いながら踊る
1・5 同行する人	マイクを使った聖歌の歌唱（1人）、太鼓の演奏（3人）を伴奏に踊る
1・6 楽器	太鼓 ・ 鈴
2振り付け(コレオグラフィック)分析	
2・1 空間特性	
2・1・1 パーソナルスペース	右手で鈴を持ち、左肩に杖の上方を乗せ左手で杖の下方を持つスタイル 体の動きには鈴を上下に動かす、体を左右に揺する、足踏み、歩行などがある
2・1・2 空間デザイン	最初は約15人ずつに分かれた聖職者が3Mほど離れた2列に並ぶ しだいに2列が50cmぐらいいまで近づくが、また離れていく 後半になると歩行のスピードが速くなり、クライマックスは2列を崩し太鼓を囲んだ円になり、円周上を全員で回る
2・2 時間特性	
2・2・1 所要時間	約30分
2・2・2 テンポ	A ♩≒33、B ♩≒45、C ♩≒54、C' ♩≒108 のテンポで構成されている
2・2・3 拍子	A 4拍子、B 4拍子と6拍子、C C' 6拍子
2・3 様式(スタイル)特性	
2・3・1 姿勢	若干前かがみ
2・3・2 重心の位置	重心は低い 右足から左足へ、左足から右足への重心移動が多い 足の裏が地面についている時間が長い
2・3・3 緊張・弛緩	弛緩の動作が主 体を揺らす、重心を落とすなどの動きが多い
2・3・4 動作の中心	動作の中心は、手、胴体、下肢
2・3・5 動作の質	A、Bパート 常にゆっくり動く C、C'パート リズミカルに動く
2・3・6 ステップパターン	全員で同じステップを踏む 一定されている
2・3・7 正確さ	列や円で行うので、体の方向、足の運び方、鈴の鳴らし方など規則的である
2・3・8 情緒状態	厳か
2・3・9 外形	儀式舞踊
2・3・10 動作相違	男性のみで相違なし

挟んだ向かい合わせの2列(写真8)であったが、教会の外の儀礼では、聖職者が3mほど離れて向かい合わせで2列に並び(写真9)、その2列が近づいたり離れたりした後、太鼓演奏者を囲んで全員で円になり、円周上を全員で周るなどの空間デザインが見受けられた。アクアクアムの所要時間は約30分であった。

2 舞踊のリズム

筆者の調査で明らかになった教会内で踊られたアクアクアムの詳細を、キンバリン(1986)の教会の音楽の分析に依拠して、「教会内の儀礼の舞踊“アクアクアム”の流れ」(表7)としてまとめた。アクアクアムには、前述したようにA-B-C-C'のフォームがあり、そのテンポは、Aは♩ \equiv 33、Bは♩ \equiv 45、Cは♩ \equiv 54、C'は♩ \equiv 108であった。また、キンバリンは、Aを4分の4拍子、Bを4分の4拍子と4分の6拍子、Cを8分の6拍子、C'を8分の6拍子で記譜している。

リズムを伴奏しているのは太鼓である。太鼓演奏者は、B(♩ \equiv 45)では座って太鼓を叩いていたが、C(♩ \equiv 54)で立ち上がり、C'(♩ \equiv 108)では高度な演奏技術を披露していた。例えば、片手だけの連打、回転しながらの連打、立ったり座ったりなど態勢を変えながらの連打、首のアイソレーションの動きに合わせた連打などであった。杖と鈴を持って踊るのは聖職者であった。聖職者は、杖をA(♩ \equiv 33)では聖歌に合わせて波打つように動かしていたが、C'(♩ \equiv 54)では杖を太鼓に合わせて左右に振っていた。またB(♩ \equiv 45)では、鈴を下方に振って鳴らしていたが、C(♩ \equiv 54)やC'(♩ \equiv 108)では鈴を上下に振って鳴らしていた。杖も鈴も持たずに踊りの列に加わっていた聖職者⁽²¹⁾は聖歌を歌っていたが、C(♩ \equiv 54)になると両手を前に出し掌を上に向け左右に揺すりだし、C'(♩ \equiv 108)になると掌を揺すりながら足踏みをはじめた。最終的

には、杖と鈴を持った聖職者も掌を上に向けた聖職者も左右に体を揺すりながら前後に歩き出し、2列で向かい合った聖職者が互いに近づいたり離れたりするようになった。この時には、手拍子や喉を鳴らす声、鳥がさえずるような声(ビブラート)、小さなジャンプなどが加わり、賑やかな雰囲気になった。その後、聖歌が終わると踊りも終わった。

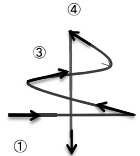
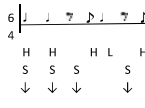
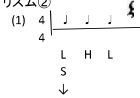


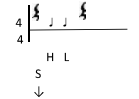
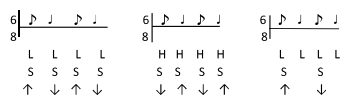

3 舞踊動作

アクアクアムで最も多くみられた舞踊動作は、両掌を上に向け、それを左右に揺すりながら足踏みを繰り返す動作であった。また、アディスアババで観察されたアムハラ民族の舞踊で、最もよくみられた舞踊動作は、エスケスタ(Eskesta)であった。エスケスタは、アムハラ民族の代表的な舞踊動作である⁽²²⁾。肩や胸、全身をリズムカルに動かすエスケスタは、穏やかな愛情、好戦的な意識の高揚、最高潮の喜びなどの感情表現であり、アムハラ民族の舞踊はエスケスタのためにつくられているといっても過言ではない(ヴァダシイ, 1970, p.120)。本研究では、教会内で行われた儀礼の舞踊“アクアクアム”のクライマックスで観察された両手の掌を上に向け、それを左右交互に揺すりながら歩行する動作(図6)とアムハラ民族の舞踊で観察された肩を左右交互に上下に動かしながら歩行するエスケスタ(図7)をグラフノーテーションで分析したものを比較し、共通点と相違点を明らかにした。

比較の結果以下の共通点があげられた。

- ①肩を中心に動いている点
- ②手の高さ、手の形、姿勢などが、最初のポジションを保っている点
- ③肘が常に曲がっている点
- ④膝が常に軽く曲がっている点
- ⑤足先がわずかに内を向いている点

表7 教会内で行われた儀礼の舞踊“アクアクラム”の流れ

パートと長さ	観察時間	リズム と 動作	隊形	観察されたもの
(A) J=約33	約3分	 <ul style="list-style-type: none"> ・祈りの歌に合わせ、杖を使って7秒に1回の4拍子サイクルで構成された動き(左図)を繰り返す ・杖は右手に持つ ・4拍目に杖をわずかの間手放す ・杖の先端が落ちて、地面を打つ ・杖は風に揺れる木のように、または波うつように動かす 	聖職者は2列で向かい合う	歌杖
(B) J=約45	リズム① 約4分 リズム② 約16分	<p>リズム①</p>  <p>(記号の意味)</p> <p>H 太鼓高い音 L 太鼓低い音 S 鈴の音 ↓↑ 鈴の上下</p> <p>リズム②</p> <p>(1) </p> <p>(2) </p> <p>(3) </p> <p>(4) </p> <p>リズム①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太鼓はおおよそ8秒に1回の6拍子サイクルで演奏する ・鈴を下方に振る動作を伴う ・鈴は、右手に持ち、リズムカルに動かし、大きく鳴らす ・杖は左手に持ち、先端は地面につけておく <p>リズム②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・太鼓は(1)~(4)のリズムを規則的なパターンで演奏する ・鈴を下方に振る動作を伴う ・鈴は右手に持ち、ゆっくり、やさしく鳴らす ・杖は左手に持ち、先端は地面につけておく 	聖職者は2列で向かい合う 2列の間に太鼓を3台置き、横に太鼓演奏者が座る 太鼓演奏者は座って演奏する	歌太鼓杖鈴
(C) J=約54	約1分	 <ul style="list-style-type: none"> ・太鼓演奏者が立ち上がる ・聖職者がリズムに合わせからだを前後に揺する ・聖職者がリズムに合わせ左右にからだを揺する ・杖は左手に持ち、鈴を右手にもち、鈴を上下に動かして鳴らす ・鈴や杖をもっていない聖職者が、両手を上に向けリズムに合わせて左右に揺する 	太鼓演奏者が立ち上がる 聖職者は2列で向かい合う	歌太鼓杖鈴杖掌
(C) J=約108	約3分	 <ul style="list-style-type: none"> ・リズムが今までの2倍の速さになる ・太鼓演奏者が立って演奏し、太鼓の演奏中に、ジャンプ、回転、しゃがむなどの激しい動作を伴う ・聖職者は杖は左手に持ち、鈴を右手に持ち、(C)の2倍の速さで鈴を上下に動かして鳴らす ・聖職者がリズムに合わせて杖や鈴をもったまま左右に体を揺すりながら前進、後進をする ・鈴や杖をもっていない聖職者は、手拍子をする ・手拍子をしていたものは、列が近づいたり、離れたるときには両手を上に向け、左右に揺すりながら前進、後進をする 	太鼓演奏者は立って演奏する 聖職者は2列で向かい合いながら互いに近づいたり、離れたりする	歌太鼓杖鈴杖手拍子掌 喉を鳴らす声

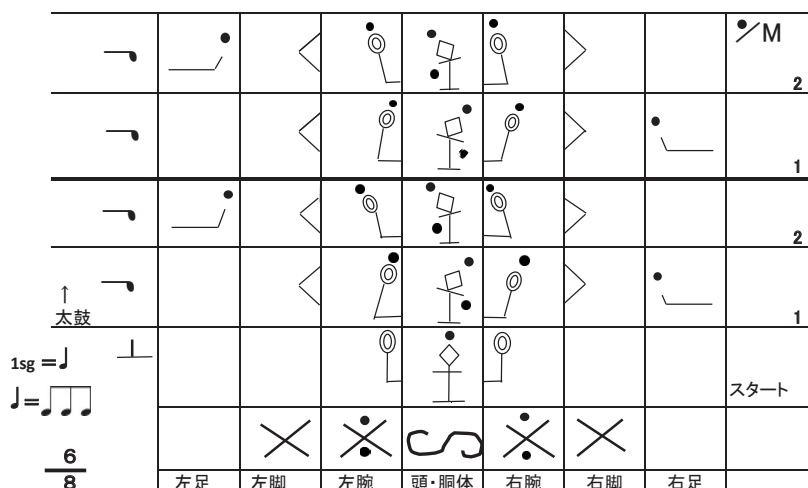


図6 教会内で行われた儀礼の舞踊“アクアクアム”のクライマックス(c')で観察された両
掌を上に向け、それを左右交互に揺すりながら歩行する動作のグラフノーテーション

スタートポジション：膝はわずかに曲がる（15度から30度）

両肘が曲がる (90 度ぐらい)

両掌を前方に出す

足先はわずかに内向き

顔は正面を向く

1. (J) : 右肩を普通的位置より低い位置に下げる
両手の掌を上に向け右前へ軽く出す
顔を右手の方へ軽く向ける
右足を前方に少し踏み出す
2. (J) : 左肩を普通的位置より低い位置に下げる
両手の掌を上に向け左前へ軽く出す
顔を左手の方へ軽く向ける
左足を前方に少し踏み出す

※特に記載がない場合は、同じ姿勢を保持している

- ⑥右肩が動くときは顔が右へ向き、左肩が動くときは顔が左へ向く点
- ⑦右肩が動くときは右足が動き、左肩が動くときは左足が動く点
- ⑧腰があまり動いていない点

また、以下の相違点があげられた。

- ①手の形の相違
- ②リズムの相違
- ③アクセントの相違

IV 考察

教会内で行われたアクアクアムのクライマックスで観察された“両掌を上に向け、それを左右交互に揺すりながら歩行する動作”とアムハラ民族の舞踊の核となる動きであるエスケスタのひとつ“肩を左右交互に上下に動かしながら歩行するエスケスタ”をグラフノーテーションで分析した結果、前述のように 8 点の共通点と 3 点の相違点があげられた。筆者が、1998 年 2 月にアディ

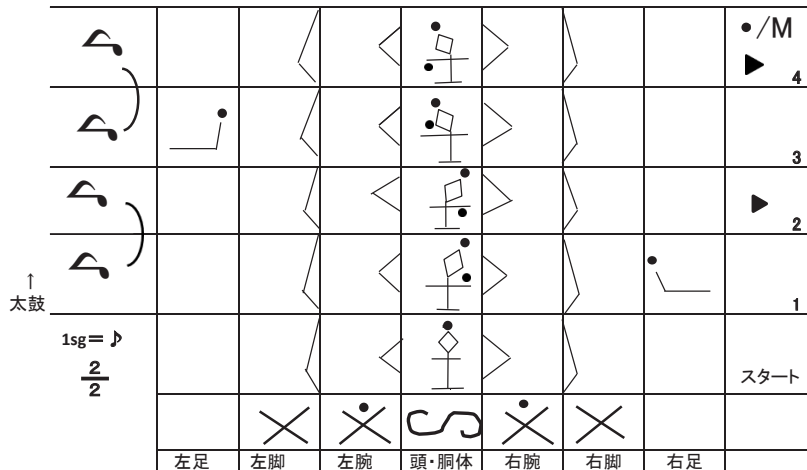


図7 肩を左右交互に上下に動かしながら歩行するエスケスタのグラフノーテーション

スタートポジション：膝はわずかに曲がる（15度から30度）

両肘が曲がる（45度から60度）

両手は腰にそえる

足先はわずかに内向きに固定

顔は正面を向く

1. (♪)：右肩を普通の位置より高い位置にあげる
顔を右肩の方に軽く向ける
右足を前方へ少し踏み出す
2. (♪)：右肩を普通の位置より低い位置に下げる
強いアクセントをとまう
顔は右肩の方を軽く向いたまま
3. (♪)：左肩を普通の位置より高い位置にあげる
顔を左肩の方に軽く向ける
左足を前方へ少し踏み出す
4. (♪)：左肩を普通の位置より低い位置にさげる
強いアクセントをとまう
顔は左肩の方を軽く向いたまま

※特に記載がない場合は、同じ姿勢を保持している

スアベバにおいてエチオピアで最も有名な舞踊手の1人であるデスタ（Desta Gebre）氏にエスケスタを習った時は、デスタと向かい合い、歩きながら、跪いて、四つん這いになって、肩だけを動かす練習をひたすら行った。その時に、足先を少し内に向け、膝を軽く曲げ、手を腰にそえる基本姿勢の保持が、肩だけを動かすためには非常に重要であると教わった。また、跪く姿勢、四つん這いの姿勢は、腰や膝を極力使わないための練習で

あり、アムハラ民族の舞踊では腰から膝までの動きが抑制されていることが分かった。また、2015年9月にアディスアベバで元エチオピアンポリスミュージック＆シアター（Ethiopian Police Music and Theater）の舞踊手で舞踊教師でもあったアセゲディッチ（Aseggedech Difek）氏から、エスケスタを習得するためには、首のアイソレーションの練習が不可欠だと教わった。それは、首のアイソレーションから波動して肩の動きに連動するため

であり、エスケスタの動きの起点が首のアイソレーションであることが分かった。確かに、アムハラ民族の舞踊では、速く大きなエスケスタになるほど首と肩の動きが滑らかに連動していることが分かる。また、この首のアイソレーションから波動する肩の動きは、アムハラ民族の主食である穀物テフ (teff)⁽²³⁾ を石と石板を使って脱穀する時の動きに似ていることをアセゲディッチが指摘している。以上の考察から、前述の8つの共通点はすべてエスケスタの重要な特徴であるといえる。よって教会内で踊られたアクアクアムにはエスケスタの重要な特徴があてはまり、儀礼の舞踊であってもアムハラ民族の核となる動きが含まれていると考察できる。

教会の外でおこなわれた儀礼では、聖職者と信者が一緒にジョギングをして儀礼が始められたが、ジョギングで人々のテンションを上げたり下げたりする場面は民族の舞踊でもよくみられる。バンタレムは、教会の外で行われるアクアクアムのクライマックスでは、聖職者達が背後の地面に杖を落として拍手をし、助祭がこの杖を集めると述べている。この時、司祭はキリスト、杖は十字架、助祭はシモン (shimon)⁽²⁴⁾ という名の男性を表現しており、杖を落とすことはキリストの疲れと疲労の象徴を意味していて、キリストが処刑の前に死んでしまうのではないかと恐れたユダヤ人が、シモンにキリストを助けるように命を下した場面であると説明している (バンタレム, 2010, p.135)。しかし、筆者の調査ではクライマックスで円になっても聖職者は右手に鈴を持ち、左肩に杖の上部をのせ、左手で杖の下方を持つスタイルで踊っていて、杖を落とすことはなかった。また、クライマックスでは周りで見ている信者の喉を鳴らす声、鳥がさえずるような声 (ビブラート)、拍手の音が最高潮に大きく力強く鳴り響き、前述の疲れや疲労、死などの暗い雰囲気は全く感じられなかった。このような人々の喉

を鳴らす声や拍手は、民族的な舞踊で多く観察されており、人々の気持ちの高揚や仲間意識の象徴を意味し、舞踊を踊る原動力 (池田⁽¹⁾, 2000, p.46) になっていた。さらに、アムハラ民族の舞踊のクライマックスでは、仲間に囲まれたソリストが、跪いた状態で力強いエスケスタを披露する。跪いた状態は激しく興奮してきたことを意味し、最も力強い動きと称される (ヴァダシィ, 1970, p.145)。アクアクアムのクライマックスでも、円になって歩く聖職者の中央で、太鼓演奏者が大地に跪き天を仰ぐように反り返って力強く演奏しており、その様子は、民族的な舞踊のクライマックスと類似していた。そのため、バンタレムが述べているような「儀礼の後半、ケベロの演奏が速く強くなる部分は、ユダヤ人によって顔を隠されたキリストが前後から耳障りなほどムチウチされている音」 (バンタレム, 2010, p.132) には聞こえなかった。さらに、聖職者は男性のみであるが、外での儀礼では、アクアクアムの周りで、信者の女性が太鼓を叩き、聖歌を歌い踊ることも許されており、女性に対する決まりはなかったことから、エチオピア正教会の教義とは異なる空間であったといえる。ヴァダシィは、ゴッジャム地方に住むアムハラ民族の舞踊の特徴に以下の3点を挙げている。①ソロ性 (ソリストや太鼓演奏者は常に円に囲まれている)、②クレッシェンド性 (はじめはゆっくりで徐々に速く盛り上がる舞踊)、③競合性 (エスケスタの競い合い) である (ヴァダシィ, 1970, p.127)。前述の筆者の考察にも、ソロ性やクレッシェンド性が確認されており、円の中心に位置している太鼓演奏者3名の高度な演奏技術の競い合いを鑑みれば、教会の外で踊られたアクアクアムにもアムハラ民族の舞踊の特徴が含まれていると考察できるだろう。

相違点に関しては、アムハラ民族の舞踊にはみられない点であるため、宗教的な舞踊の特徴であると考えられる。アムハラ民族の舞踊では、両掌

を上に向けるような動作は、見当たらない。両掌を上に向けることは、特別な意味を持つのだろうか。神への祈りの象徴を意味するのだろうか。相違点に関しては、今後さらに調査を行い、明らかにしていきたい。

V 結語

本研究では、エンクタタシュを事例にして、エチオピアの伝統的祝祭における舞踊の意味を明らかにしてきた。その結果、9月11日のエンクタタシュはエチオピア正教会の祝祭日であるが、人々が教会の儀礼の解釈とは異なる民族的な解釈で祝っていたことが明らかになった。また、アクアクラムにおいては、エスケスタにみられるような普遍的に受け継がれてきたアムハラ民族の潜在的な舞踊動作が含まれていることが明らかになった。以上のように、エチオピアのエンクタタシュで調査できた舞踊には宗教的、民族的といった二面性があり、宗教的、民族的なものが人々の意思によって融合され、継承されてきた可能性がある。と結論づけられる。それは、エチオピア正教会が、民衆の信仰心によって継承されてきたからではないか。例えば、1622年にカトリックを国教と定めたオロモ (Oromo) 地方の王ススヨネス (Susneyos) は、これに反発するエチオピア正教会の人々を鎮圧しようとして軍を投入したが、エチオピア正教会の農民兵が大量に殺害されたことに衝撃を受け、1632年にエチオピア正教会を再び国教に定めている (石原, 2014, p.41)。このような民衆の信仰心がローマ教皇らイエズス会の度重なるカトリックへの改宗の要求も拒み、教会の力を権限に利用した王の支配にも屈せず、独特な慣習を継承した世界的にも珍しいエチオピア正教会を今日に現存させてきたといえよう。その要因は、地方の聖職者や信者が教義のゲエズ語を理解できなかったこと、キリスト教徒とユダヤ教徒

は聖書を思うままに解釈する自由があること、政治的な策略と関連して寛容な立場での改宗が進められたことなどを背景に、民衆が自分たちの文化や風習、慣習、観念そして舞踊を反映しながらエチオピア正教会を受容するに至ったことにあったといえよう。

エチオピア正教会の2007年の信者数は2000年に比べ約200万人減少し、プロテスタント系キリスト教会への転向が急増しており、その理由は帝政時代からの社会的不公平による国家支配に対する人々への不信と反発であるという (藤本, 2014, p.163)。また、近年エチオピアの経済が発展し人々の暮らしが大きく変化したため、若者の宗教離れが進んでいる現状がある。今後は、そのようなエチオピアで祝祭の舞踊がどのように変化した、どのような役割や意味を担っていくのか、引き続き研究していきたい。

【注】

- (1) 本稿執筆者、野田章子。執筆時は旧姓。
- (2) 「日本ではエチオピアのキリスト教を『エチオピア正教』と呼ぶことが多い。エチオピア正統テワヒド教会の英語による自称は、『Ethiopian Orthodox Tewahedo Church』であるため、この呼称は誤りとはいえない。しかし、同教会がカルゲドン派の東方正教会に属しているわけではない点に留意する必要がある」(石川, 2014, p.20-21)。
- (3) 「エチオピア暦では1年は、30日を1か月とする12か月と、残りの5日 (閏年は6日) を1か月とする、計13か月からなる。(中略) また、エチオピア暦は西暦 (グレゴリオ暦) より7～8年の違いがあり、西暦2011年はエチオピア暦で2003年～2004年に相当する。エチオピア暦は、西暦の9月11日 (前年が閏年ならば12日) を正月 (メスケレム月1日) とする」(石原, 2014, p.65)。
- (4) エチオピア正教会はエチオピア帝国時代 (1270年から1975年) およそ700年間国教とされていた。
- (5) 「聖職者には次の各位がある。すなわち、法王 (パトリヤルク)、大主教 (リカ・パパス)、主教 (パパス)、準主教 (エピスコポス)、司祭 (ケス)、執事 (ディヤコン)、修道僧 (マナクセ) である」(鈴木, 1969, p.82)。
- (6) 予備調査は、1999年7月23日～8月28日、事後調査

- は2015年9月7日～9月30日および2016年9月1日～9月15日に同地域で行った。
- (7) 調査の記録および編集で活用した ICT 機器はモーションアナリシス社のソフト EvarT 4.2、マイクロソフト Kinect for Windows センサー L6M-00020、Kinect for Windows SDK v1.8、MikuMikuMoving V1.2.7.2 である。
- (8) 「ルドルフ・ラバンの考案した Labanotation は、動きを記号を用いて記述することを可能にしたもので、音楽の五線譜を縦にしたような形をしており、下から上へと読み進む。中央の縦線が身体の中心を表し、中心線の右側に身体の前側の動作を、左側に身体の後側の動作を、記号を用いて記述するため、踊り手が譜面を読みながら動きを再現しやすいという特徴がある。足や手の動きといった身体各部の詳細な動作についても記述可能であり、特定の舞踊様式に依存しない現時点で最も普遍的な舞踊記譜法である」(中村, 2002, p.94)。
- (9) ガートルード・クーラス (Gertrude P. Kurath) (1960) は、舞踊そのものを研究テーマにしたアメリカの民族学者で、舞踊人類学のパイオニアといわれている。
- (10) 前日の夕刻には、両手に生きた鶏の足を持ちぶら下げながらバスを待っているスーツ姿の男性や、肩に生きた羊を乗せその足を両手でつかみ足早に帰宅する男性などが見受けられた。エチオピアでは、女性は動物を屠ることができないため男性が屠殺する、羊や牛は料理に時間がかからないため、元日の朝に男性が屠殺するという。
- (11) アムハラ語でドロは「鶏」、ワットは「煮込んだ料理」を意味する。ドロワットを作るためには、鶏の臭みを抜くために熱湯を何度も変えて茹でる作業、玉ねぎを微塵切りにして激辛のエチオピア産の香辛料で炒める作業、全ての材料を煮込む作業など全部で 18 時間を要するため、女性による料理は夜通し行われていた。
- (12) インジェラはエチオピアの主食であり、主にエチオピア北部高地で栽培されているテフと呼ばれる穀物の種子を粉末にしたもので作られる。
- (13) ヤベシヤダボは、直径 50cm、厚さ 10cm 程度の分厚いケーキのような見た目、甘くない素朴な味である。インフォーマント氏宅では、新年にカットされ、約 20 人の客人に振る舞われていた。
- (14) 旧約聖書の第 1 章にノアの鳩がオリーブの枝とキエテマを運んできたのは、洪水で溢れた水がひいたことをノアに知らせるためだったと記されており、それが濡れた草や美しい花で新年を祝うエチオピアの風習の由来になっているという。(パンタレム, 2010, p.47) しかし、このような草や花が手に入りにくいアディスアベバなどの都市では、生草だけでなく緑のビニール紐でつくった草や、花の絵が描かれたカードが売られ生草や生花に代用されていた。

- (15) 今までの筆者の調査からチボーは、8月21日の変容の祝日ダブラタボー (Dabra Tabor) 別名ブヘ (Buhe)、9月11日の新年の祭日エンクタタシュ (Enkutataash) の前夜祭、9月27日の十字架奉崇祭のマスカル (Masqal) および前夜祭で燃やされることが明らかになっている。特にマスカル前夜祭では、デメラ (Demara) と呼ばれる祝賀のためのかがり火がつくられる。

- (16) ホイヤホイエの歌詞は、アディスアベバ大学民俗博物館副館長タマスゲン・ヨハネス氏への聞き取り調査によって明らかにされたものである。

Hoya Hoya	さあ！ さあ！
Hoya Hoya	さあ！ さあ！
Eza Mado	あちらこちらに
Chis Yichesal	煙がのぼっている
Agafari	あの方たちが
Yidegsal	みんなのために食べ物を用意してくれている
Yachin Digis	食べ物がたくさんあるあの場所
Wuche Wuche	食べて、食べて、お腹いっぱいになってから
Bedink Alga	小さいベッドに横たわって
Tegelabiche	ひと休みしよう
Yachi Dink Alga	でもあの小さなベッドは
Ametsegna	とても変わっている
Yaland Sew	1 人だけしか
Atastegna	眠ることができないなんて
Hoya Hoya Gude Chewata New Lemadie !	さあみんなで楽しみましょう！

- (17) 教会の儀礼の舞踊で使われる楽器については以下のように説明されている (パンタレム, 2010, pp131-135)。

○ケベロ (Kabaro) (写真 10)

ケベロは最も古い教会書物に登場している。ケベロはイエス・キリストの象徴でありその演奏は、十字架にはりつけられた彼の鼓動を表している。木、金、銀、銅などでつくられたケベロの中心部分はキリストの身体である。狭い面と広い面があるふたつの底は、キリストの人間性と神性を例えている。その端を覆っている皮は、はりつけの時キリストの頭におかれた冠の象徴とされている。ケベロのまわりにはられている布は、キリストがムチウチを受けている間ユダヤ人がキリストの神聖を確かめるために顔にかけた布だと言われている。ケベロを担ぐためのベルトは、キリストのムチウチのムチだという。ケベロの内部は、キリストの墓であり、キリストのよみがえり後は空洞になっていると解釈されている。儀礼の後半、ケベロの演奏が速く、強くなる部分は、ユダヤ人によって顔を隠されたキリストが前後から耳障りなほどムチウチされている

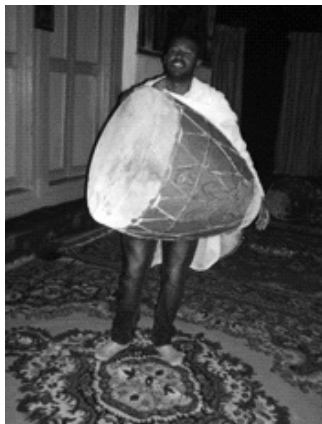


写真 10 ケベロ (Kabaro)

2014.9.8 筆者撮影

る音だという。このような解釈からも分かるように、ケベロはキリストであり、その音は神霊の音だと信じられている。ケベロは英語でドラムすなわち太鼓と訳される。

○ツナシル (Tsanatsil) (写真 11)

ツナシルは、最も古い教会書物に登場している。ツナシルは、金、銀、銅、鉄などで作られている。その上部は虹もしくは逆さ弓の形をしていると言われ、虹は神がヘブライの族長ノア (Noah) と平和の約束を誓った場所だと解釈され、逆さの弓は神の犠牲によって平和がもたらされたことを意味していると説明されている。その下には二本の平行なワイヤーがあり、丸や四角の薄い金具がそれぞれについているが、これはつけられている数によって、キリストの神聖や人間性、三位一体などのさまざまな解釈がある。その上には小さな十字架がついている。十字架は、ヤコブ、キリスト自身などの説がある。その上部を支える二本のスタンドは、旧約聖書と新約聖書を意味していて、現存する聖書がその両方から成り立っていることを示しているという。つまりエチオピア正教会では旧約聖書が新約



写真 11 ツナシル (Tsanatsil)

2014.9.8 撮影筆者

聖書と同じぐらいの重要性を持っているのである。ツナシルは、英語でシストラムすなわち打楽器および鈴と訳される。

○マクアミア (Mequamia) (写真 12)

マクアミアは、木でできていて、一番上には金や銀、鉄でできた十字架がついている。ヤコブ (Jacob) もしくはモーゼ (Moses) の杖だと言われ、マクアミアの十字架は、はりつけにされたキリストだと解釈されている。儀礼の舞踊では、まず司祭がマクアミアを肩に担ぐ。これは、キリストが彼のはりつけに使う十字架を運ばされ旅したことに由来するという。途中で司祭がマクアミアや足で地面を叩くのは、旅の途中でユダヤ人が何度もキリストを押したり引いたりしたために転倒した場面を表している。その後、司祭は互いに向かい合いながら二列に並び、前進したり後退したりする。聖書には、キリストを捕えたときに、ユダヤ人がキリストの威厳ある態度に動揺し、後退し、3回地面に転んだと記されている。司祭の踊りの後退は、この神の力がみなぎったキリストの顔を見たときのユダヤ人の後退を表しているという。マクアミアは英語でステッキすなわち杖と訳されている。



写真 12 マクアミア (Mequamia)

2014.9.8 筆者撮影

- (18) この黄色い花は、アディアベバまたはマスカルフラワーと呼ばれている。アディアベバは「新しい花」を意味する。エンクタタシュ前後から咲き始め、マスカルスの頃満開になる。
- (19) アベバイオッシュの歌詞は、国立民族舞踊団舞踊手への聞き取り調査によって明らかにされたものである。

Abeyoish Lemelem

新年の花が咲いている

Abeyoish Lemelem

新年の花が咲いている

(中略)

Adeyie Yebere Mudayie Kolelebeyi 新年の花を楽しもう
 Etyeie Abebashe Eteie Abebayei 彼女は新年の花のよう
 だ
 Ayei Eteyie Abebayei 彼女は
 Eteyie Abebashe Seteligen Kerema 言っている
 Ayei Eteyie Abebayeie 彼女は
 Telayein Heidche Behamelyie Chelema 帰ってくる
 Ayei Eteyie Abebayei 彼女は
 Keberew Yeikoyu Keberew 豊かに暮らすだろう
 Bamete WendeLeje Weldew 神が子を授けてくれ
 るでしょう
 Selasa Teiejoche Aserew 神がお金や牛をくれ
 るでしょう
 Keberew Yeikoyu Keberew 豊かに暮らすだろう

(20) 本稿では、すべて標準時間で記載しているが、エチオピアには特有の時刻の捉え方、エチオピア時間というものが存在する。エチオピア時間について鈴木は「時計の読みは、西方の朝六時に相当する時から始める。西方の朝七時が一時であり、正午が六時、夕六時が十二時となる」(鈴木, 1969, p.89)と説明している。さらに鈴木にならって付け加えると、夕七時は一時、正午が六時、朝六時が十二時になる。したがって、前述の4時から6時は、エチオピア時間では10時から12時となる。鈴木によれば、朝12時は日の出の時刻で1日の始まりである。

(21) 教会内では、杖や鈴は貸し出されていて、筆者にも杖と鈴が渡された。しかし、聖職者全員が杖や鈴を持っていたわけではなく、持ちたい人が持つといった雰囲気であった。そのため、何も持たずにアクアクラムに参加している聖職者が多数いた。さらに、杖や鈴を持っている聖職者の中にも、アクアクラムのクライマックスでは、杖や鈴をおいて、両掌を上に向け、それを左右に揺すりながら前後に歩く姿がみられた。教会の外の儀式では、事前に決められていた聖職者がアクアクラムを踊り、最初から最後まで全員杖と鈴を持っていた。

(22) エスケスタの詳細は、ヴァダシィ (1970, pp.120-146)を参照のこと。ヴァダシィはアムハラ民族の舞踊の最も興味深い点は、脚の動作をあまり使わずに、肩や胸、全身をリズムカルに引っ張ったり、振ったりして動かすことだと述べ、この動作を“ショルダーダンス”と呼んでいる。また、この動作がアムハラ語では“エスケスタ”であることも明らかにしている。前掲のヴァダシィの文献を参考によると、エスケスタは以下の3種類に分類できる。①肩を左右交互もしくは同時に上下に引っ張ったり、振ったりして動かす。②肩を左右交互もしくは同時に前後に引っ張ったり、振っ

たりして動かす。③肩を左右交互に動かし、前方もしくは後方に向かって円または半円を描くように捻って動かす。分析対象の「肩を左右交互に上下に引っ張るエスケスタ」は、最も一般的なエスケスタである。

(23) テフは、イネ科スズメガヤ属の食物である。主にエチオピアで栽培され、種子が穀物として主食となっており、インジェラの原料である。

(24) イエス・キリストの12人の使徒の一人。ヘブライ名でシオン、ギリシア名ではペテロ。

【文献】

相原進他 (2016) エチオピアの舞踊特性と舞踊のデジタル記録・解析・考察 (上). 立命館大学産業社会学部編, 立命館産業社会論集, 52(3): 93-113.

相原進他 (2017) エチオピアの舞踊特性と舞踊のデジタル記録・解析・考察 (下). 立命館大学産業社会学部編, 立命館産業社会論集, 52(4): 97-115.

Baranabas, Solomon (2012) “STATE CHAGE & CONTINUITY in ETIOPIA: Marked by Insurgency, Secession and Federalism”, AFARSCO, Addis Ababa.

遠藤保子 (2002) グラフノーテーションによる舞踊研究—ナイジェリアの舞踊を中心として—. 立命館大学博士論文 (社会学).

遠藤保子 (2005) アフリカの舞踊研究. 日本体育学会編, 体育学研究, 5: 163-174.

遠藤保子 (2010) スポーツ人類学と開発教育—モーションキャプチャを利用したアフリカの舞踊教材—. 日本スポーツ人類学会編, スポーツ人類学研究, 12: 1-25.

遠藤保子他 (2014) 無形文化財の伝承・記録・教育—アフリカの舞踊を事例として. 文理閣.

藤本武 (2014) 邪視・変身/食人—エチオピア・マロにおける呪術的信仰の諸相. 石原美奈子編, せめぎあう宗教と国家—エチオピア神々の相克と共生. 風響社: 159-197.

池田章子 (2000) エチオピアの民族舞踊—ダンスと人びとの生活—. 立命館大学修士論文 (社会学).

石原美奈子 (2014) 国家を支える宗教—エチオピア正教会. 石原美奈子編, せめぎあう宗教と国家—エチオピア神々の相克と共生. 風響社: 25-87.

石川博樹 (2014) エチオピアのキリスト教. 日本アフリカ学会編, アフリカ学事典. 昭和堂: 20-21.

川又一英 (2005) エチオピアのキリスト教 思索の旅. 山川出版.

Kealiinohomoku, Joann Wheeler (1974) “Field Guides In New Dimensions in Dance Research- The American Indian”, *CORD Research Annual* 6, pp.245-260.

Kealiinohomoku, Joann Wheeler (1976) “Theory and methods for an anthropological study of dance”, *Indiana University*

- Doctoral Dissertation.
- Kimberlin, Cynthia Tse (1980) "The Music of Ethiopia: Music of many Cultures", University of California Press, pp.232-252.
- Kimberlin, Cynthia Tse (1986) "Dance in Ethiopia", *International Encyclopedia of Dance*, Oxford Univ. Press, pp.530-534.
- Lepisa, Abba Tito (1970) "The Three Modes and the Sings of the Songs in the Ethiopian Liturgy", *The Third International Conference of Ethiopian Studies*, Institute of Ethiopian Studies, pp.162-171.
- Martin, György (1967) "Dance in Ethiopia", *Journal of the International Folk Music Council*, Vol.19, pp.23-27.
- 中村美奈子 (2002-03) 舞踊記譜法—用途、歴史、分類、そして応用. アート・リサーチ (2). 立命館大学アート・リサーチセンター: 89-100.
- 小川了 (1984) アフリカ舞踊類型論の試み. 藝能史研究, 86: 24-41.
- Pankhurst, Richard (1990) "A SOCIAL HISTORY OF ETHIOPIA", Institute of Ethiopian Studies Addis Ababa University, Addis Ababa.
- Shelemay, Kay Kaufman (1982) "Zēmā: A Concept of Sacred Music in Ethiopia", *The world of Music*, Vol.243, pp.52-67.
- 鈴木孝夫 (1969) 高地民族の国エチオピア. 古今書院.
- Tadesse, Bantalem (2010) "A GUIDE TO THE INTANGIBLE TREASURES OF ETHIOPIAN ORTHODOX TEWAHIDO CHURCH: Historic Perspective and Symbolic Interpretations of the Festivals", Addis Ababa Kalu Printing Press, Addis Ababa.
- Tekle, Petros F. (1961) "THE MASKALA", *Ethnological Society Bulletin*, Vol.No.1, Alula Pankhurst. (ed.), Addis Ababa University, pp.461-470.
- Vadasy, Tibor (1970) "Ethiopian Folk-Dance", *Journal of Ethiopian Studies*, Vol.8. No.2, Addis Ababa, pp.119-146.
- Vadasy, Tibor (1971) "Ethiopian Folk-DanceII:Tegré and Guragé", *Journal of Ethiopian Studies*, Vol.9. No.2, Addis Ababa, pp.191-217.
- Vadasy, Tibor (1973) "Ethiopian Folk-DanceIII: Wällo and Galla", *Journal of Ethiopian Studies*, Vol.11. No.1, Addis Ababa, pp.213-231.